

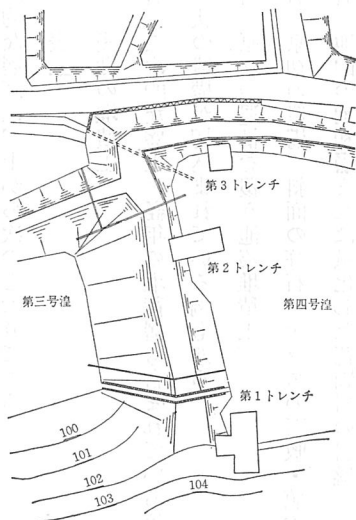
四、景行天皇陵渡土堤改修区域の調査

景行天皇陵山辺道上陵は、竜王山から西方に派生する一丘陵の西端部裾近くにあり、前方後円墳のシウロウ塚と方墳の本陵は号陪冢（上山）とともに一直線に並ぶ。丘陵の傾斜は本陵で緩やかになり、そのまゝ奈良盆地の床に至る。本陵は四段築成といってもよい前方後円墳である。周濠は、10箇所の渡土堤によって区画され、段々に設けられたダムのような景観を呈する。第二・三段は前方部と後円部が共有し、最上段の第四段は後円部のみで、最下段の第一段は前方部から後円部の一部に及ぶが、第三号濠以下は現況ではわかりにくい。しかしこの第一段の上面のテラスに相当するような犬走りがあり、第五号濠を除く後円部を繞り、第三号濠と第四号濠間渡土堤は頂部をこの犬走りのレベルに合わせている。第五号濠に面する墳丘には、第一段上面のテラスに相当する犬走りは見られず、第二段上面のテラスが異常に巾広く拡がった現状を呈し、濠際で急斜面をなして落ちこむ。第五号濠両側の渡土堤は、変形した墳丘第二段の中程の所に取り付き、その付根付近はゆるい傾斜か、平坦面となっている。この墳丘の変形は、今回の調査結果から、第五号濠の底を浚渫した土を盛げたことによると見てよい。四段築成の墳丘と段々の周濠という特異な形状は傾斜地に築造されたことによることはいうまでもない。周濠の現況が、巾狭く墳丘に沿って繞り、左右対称でない点も注意され

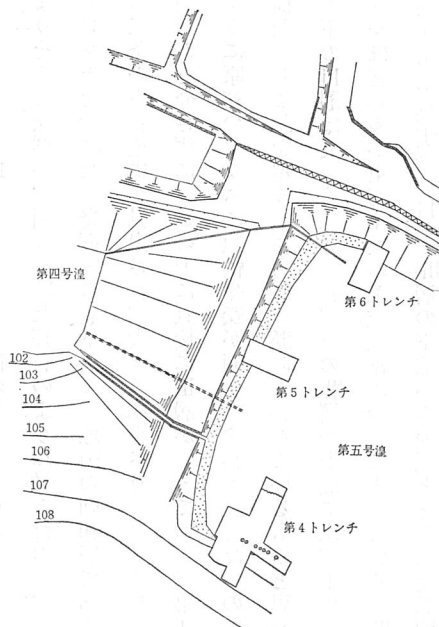
る。

本陵後円部背面の第五号濠は、長年月空堀となっていたが、護岸工事を施して貯水したところ、両側の渡土堤の漏水が著しく、一部陥没するところもでてきた。第四号濠も漏水するので、第三号、第四号、第五号、第六号濠間の渡土堤三箇所の漏水防止・樋管改修及び余水吐改修工事を行うこととなった。これに先だって発掘調査を実施した。

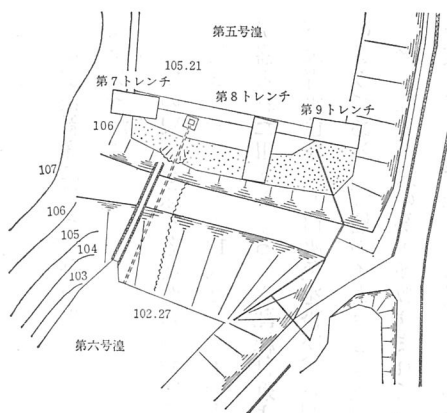
調査は、昭和五十二年十一月十日に着手し、当初二十五日終了の予定のところ、三十日までの廿一日間にわたった。廿二・廿五・廿六日には、専門家の現地検分を願い、それぞれの立場から指導を頂いた。その結果、工法としては、渡土堤の裾に長三・四・五メートルの鋼矢板を間断なく列べて打込んで止水壁とし、その頭を現在の地盤高にほぼそろえ、それから上に向けて現地表面に合わせた傾斜のコンクリート擁壁を設ける工法を採用することとなった。鋼矢板による止水壁の両端部は、外堤と墳丘に食い込ませる必要があったが、後述のように第4トレンチの部分には、最初の遺構が遺存し、調査範囲外に鋼矢板の止水壁が及ぶこととなったため、期間を延長して施工部分を調査した。他のトレンチでは、問題点もなかったため、土木工学的な検討結果に従って施工した。実際の施工時にも、監区職員が立会い、遺構・遺物等に留意した。工事予定の渡土堤三箇所に、それぞれ三本あわせて九本のトレンチを設定して発掘した（第13図）。トレンチは巾二メートルで、状況に応じて長さを二・五〜九メートルとした。第1及び4トレンチには拡張区を



1. 第三～四号埴間渡土堤

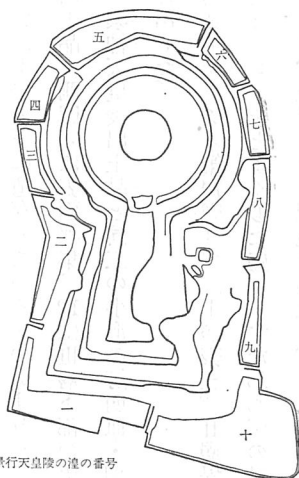


2. 第四～五号埴間渡土堤



3. 第五～六号埴間渡土堤

0 10 20 30m



4. 景行天皇陵の埴の番号

第13図 景行天皇陵トレンチ位置 (1/600 4のみ 1/6000)

設けた。

標準的な層序は、上から次のとおりである。

I 層 表土

II 層 後世の堆積土

III 層 二次的な盛土。経年の堆積層も含まれている可能性もあり、溝状の遺構が切込まれている例もある。

IV 層 原初の遺構を覆う池沼堆積土。

V 層 原初の遺構。斜面の葺石、テラスの石敷・埴輪列などがある。

VI 層 地山の朝和層または風化した花崗岩の岩盤。

各トレンチの状況は、次のとおりである。

第1トレンチ（第14図1） 墳丘斜面裾の表面に、整のつてはいないがまとまりそうな礫群が、崩れかけた葺石のように見えたので、その末端からトレンチを設けた。発掘区の最下層は、地山の朝和層である。東西に走る二条の溝状遺構が見出され、大きく削平されたように見える。腐植土層などを介さずに、この上に直接にIII層がのっており、第4トレンチのように原初のテラスに埴輪や礫が面をなすわけでもないもので、原初の遺構ないしこれを覆う堆積層は、既に失われているものと思われる。

表土下のIII層は大きく二分され、下のIII_上層の上面には、上巾〇・六五メートルほどの溝が東西すなわち墳丘裾に沿って走っている。III_上層から瓦器碗片（出土品実測図11）、III_上層の下部から燻瓦とともに元禄頃の磁器の注口片が出土しているので、III_上層の上限を知ることができる。濠底部

分の堆積土層は、当然これより新しく、III層は朝和層の土を盛ったものである。

現墳丘斜面に見える葺石らしい礫群は、崩落したもので原初のものではなかった。

地山のVI層を除く各層から埴輪円筒21片、瓦4片が出土している。

第2トレンチ（第14図2） I 層表土。II 層堆積土の下には、厚く土

が盛られたIII層がある。水涯線付近より上は赤褐色であるが、それより下は青灰色ないし白灰色を帯び、時間を置くと黄味がかかる朝和層の粘土のようである。間層のイトロとは灰黒色で有機分が多く含まれている。

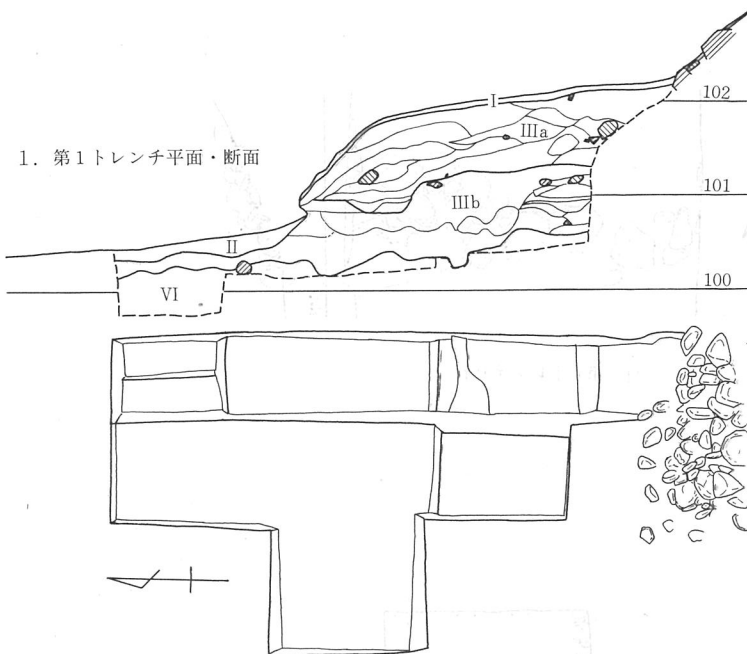
後者には人頭大の礫が多数含まれていて、濠底のヘドロと崩落した葺石を漑えて盛上げたように見える。かなり厚く盛ったようで、濠底下――〇センチまで掘下げたが、地山ないし原初の遺構は検出されず、この部位には本来の渡土堤がなかったか、あっても既に旧形を失っているか、あるいはもつと下に遺存しているかのいずれかであろう。

出土品実測図4は表面採集、12はIII層下部の灰黒色粘土層から、開化・崇神天皇陵出土品と同工の小形の灯明皿・羽釜片（本誌27・29号）と伴出した。

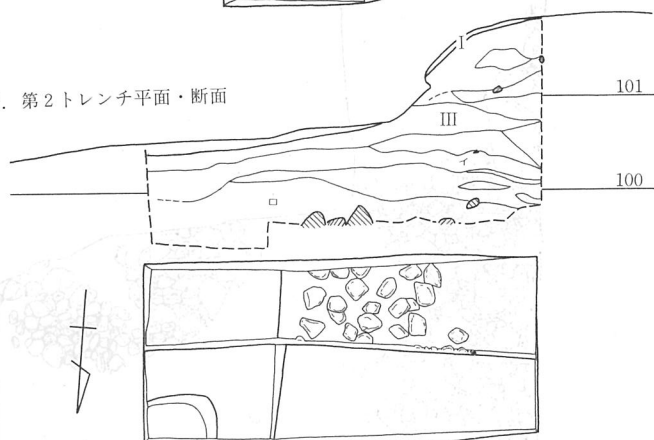
第3トレンチ（第14図3） I 層表土。II 層堤体の崩落堆積土。III 層

は第2トレンチとよく似た盛土。すなわち図の最下層を除くと朝和層に似ており、上半部は赤褐色に酸化し、水涯線付近より下は青白色に還元した粘土である。最下層は、黒灰色の粘土で、第2トレンチほど多くは

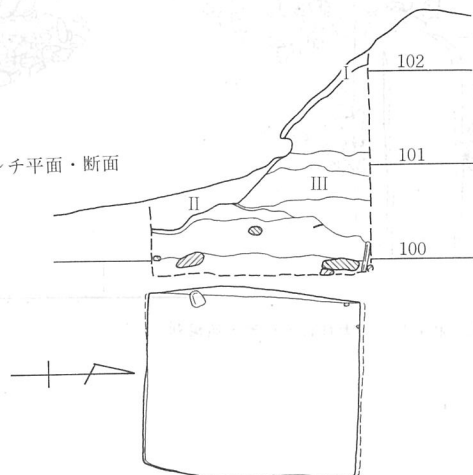
1. 第1トレンチ平面・断面



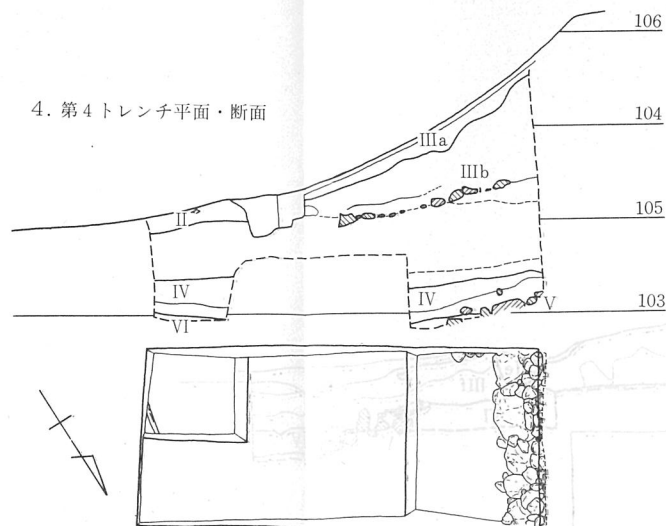
2. 第2トレンチ平面・断面



3. 第3トレンチ平面・断面

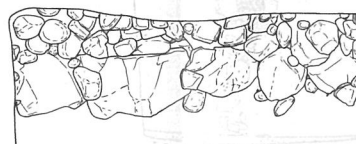


4. 第4トレンチ平面・断面

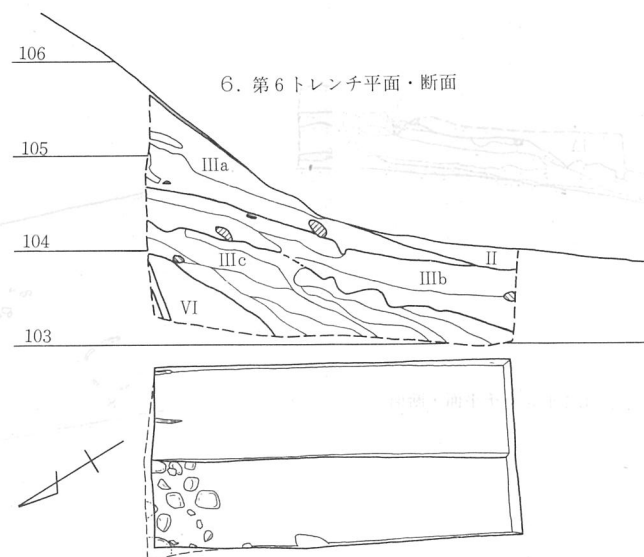


0 1 2 m

5. 第5トレンチ葬石

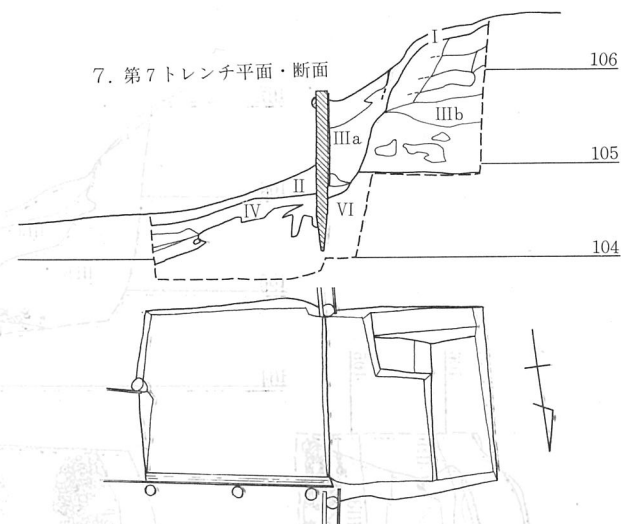


6. 第6トレンチ平面・断面

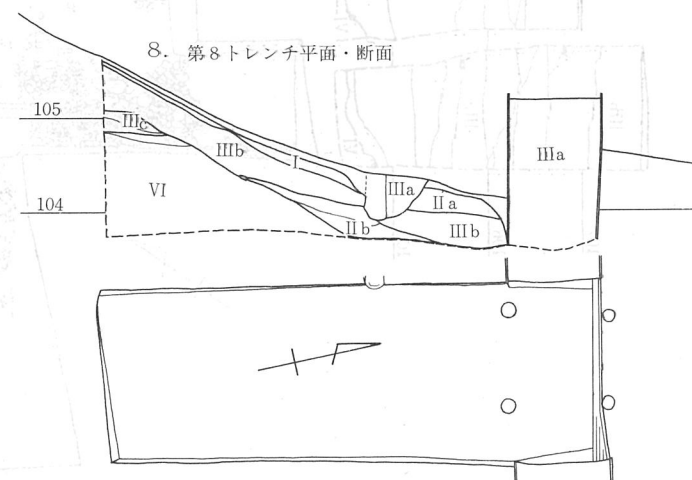


0 2 4 m

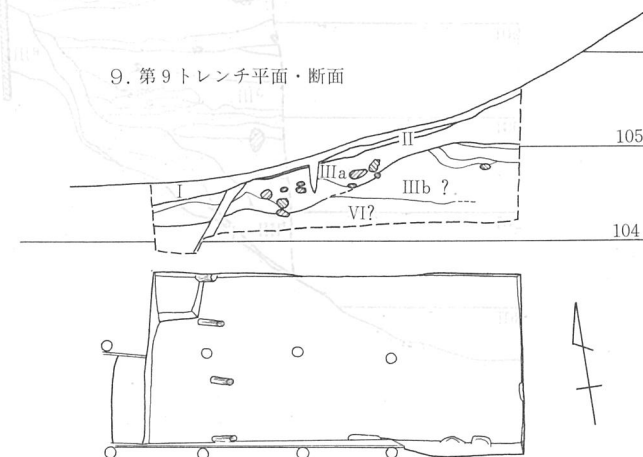
7. 第7トレンチ平面・断面

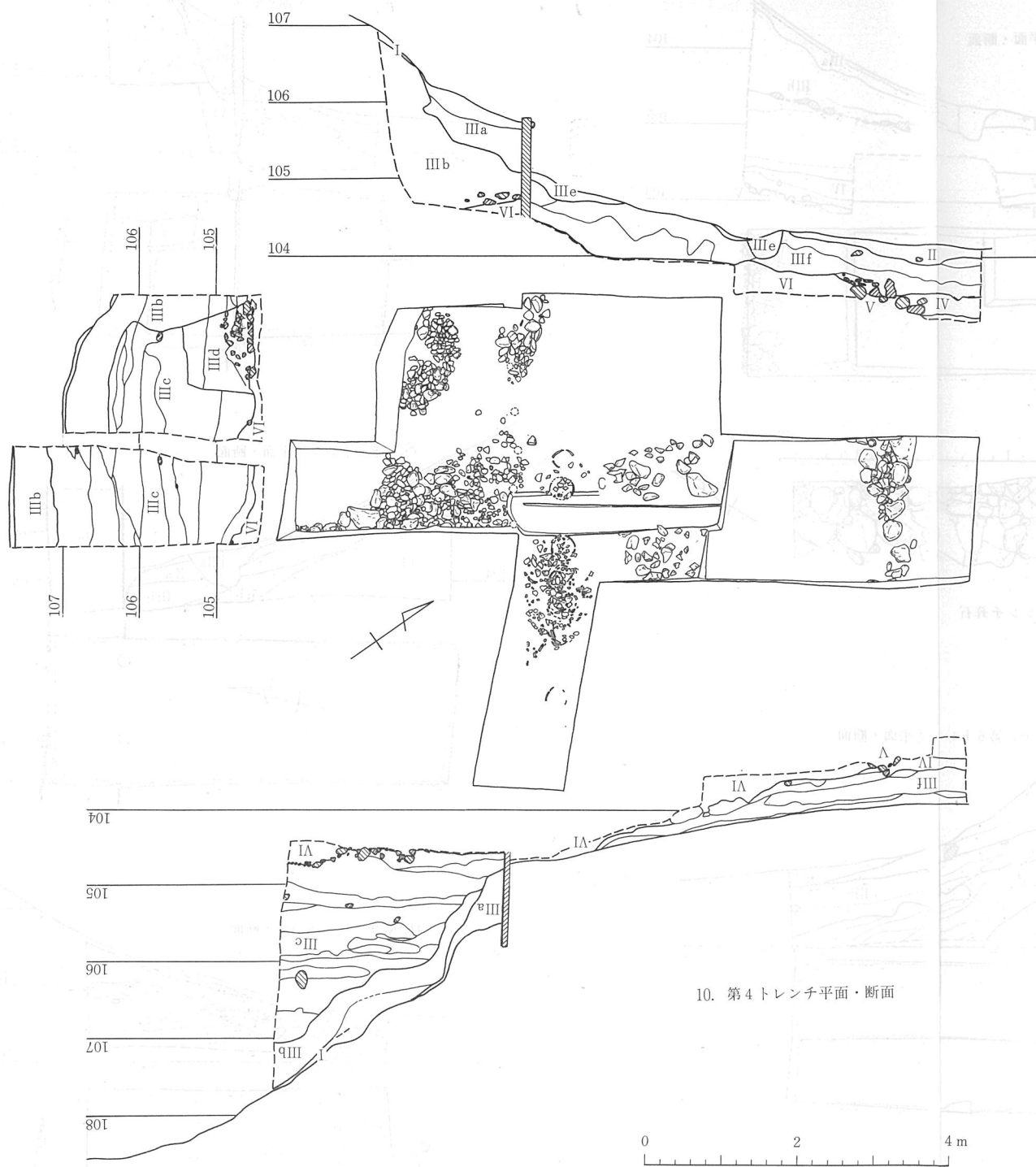


8. 第8トレンチ平面・断面



9. 第9トレンチ平面・断面





第15図 景行天皇陵トレンチ平面および断面(2) (1/80, 9. 10は1/40)

ないが、人頭大の礫をかむ。濠底を掘下げた土を外堤に盛ったように見える。

Ⅲ層青白色土層から出土品実測図66、黒灰色土直上より3・17や椀瓦、黒灰色土中より6・7・16が出土し、Ⅲ層が江戸中期を遡らないことが確かめられた。

第4トレンチ（第15図10）Ⅰ層表土。Ⅱ層は後世の濠底堆積土。Ⅵ層は地山の朝和層で、トレンチの南脇の濠底部分に露出しており、第五号濠がかなりの改変を受けたことを物語っている。Ⅴ層の原初の遺構はこの地山を掘削した上に設けられている。原初の遺構として埴輪列・これが列立していた基壇テラスの石敷・法面の葺石及びそれらの崩落した破片・礫などが検出された。

埴輪列は、埴輪円筒の胴部及び基底部が7個体遺存していた（図版六1）が、間の2個（第15図11の2・7号埴輪）とその両側は失なわれており、0・1号埴輪を標本として採り上げたが基底部すら一周しない。3・6・8号埴輪は保存措置を施して原位に残した。

埴輪列の樹立していた部分は、石敷きのテラスである。石敷は、上から葺石が崩落して堆積した礫と見るよりも、下のⅥ層の朝和層に突込んだように礫が置かれていること、破れた埴輪片がこの礫の中や上にのっていることから、本来の施設とみられる。石敷の礫は、大きいもので直径二〇センチ、拳大のものが多用され、一・二個分の厚さで敷いてある。

トレンチの奥すなわち墳丘の方に長径四〇センチをこす礫が、朝和層に接してすわっており、ここより地山のⅥ層に接する礫が約30度の角度で立上っているのが、Ⅲ層の攪乱を免がれて僅かに断面近くで検出された。これは、墳丘の葺石であろう。

埴輪列より濠側の方は、朝和層に及ぶ攪乱を受け、テラスの過半は失われている。トレンチ北端近くに、葺石の腰石とその上方の二、三個が遺存していた（図版六2 第15図9）。腰石は長径二五センチ以上の大きな花崗岩を用いて並べ、その石列は少し彎曲しているように見える。

この葺石は、地山の朝和層を掘削し、水平な濠底から約30度の傾斜で立上る基壇の法面を葺いたもので、原初の濠の内法となっていたことは明らかである。また埴輪列は、墳丘第二段が立上るまでの基壇上面のテラスに樹立されているといえる。いま仮に残存遺構から推定すると、テラスは巾約四メートル、基壇法面は巾約三メートル、高約一・三メートルを復元できる。とすると、埴輪列は、テラスのほぼ中央に位置することとなる。

Ⅳ層は、基壇の法面葺石を覆う黒褐色の池沼堆積土で、泥炭状を呈する。水中や水辺の植物が枯死して水底に粘土とともに堆積し、腐敗せずに遺存したものである。第5トレンチの葺石上にも認められ、本陵の築造時には濠底に水があったことが確かめられた。

以上のⅥ層の地山、Ⅴ層の原初の遺構及びⅣ層の原初の池沼堆積土の上は、これらを攪乱した後の埋土と盛土のⅢ層がのる。層序が複雑

で、特に墳丘側にその観が強い。墳丘第二段斜面の葺石とテラスの石敷の上に厚いⅢ_a層を盛土した後、二回の大きな掘削を受け、その度に埋め戻されている(Ⅲ_b・Ⅲ_c)。Ⅲ_c層の掘削は葺石や石敷を大きく破壊している。Ⅲ_a層は昭和四十八年度工事による板柵の裏込め土、ラス張りコンクリート護岸の置土である。Ⅲ_a層は、Ⅲ_a・Ⅲ_b・Ⅲ_c層のいずれかに対応するものである。基壇を著しく壊して、人頭大ほどの礫を多数かんでいる攪乱層である。

第4トレンチは、出土品が最も多い。その大部分は埴輪片で、地山を除く各層から出土するが、当然のことながらⅤ層から最も多い(出土品実測図35・36・46・48・50・51・53・62)。Ⅲ層から、瓦器碗・十七世紀の伊万里(18)、土師器の把手かと思われる2が出土した。

第5トレンチ(第14図4) 基盤をなしているのは、Ⅵ層の地山で、朝和層である。葺石の部分は斜めに、濠底の部分は水平に掘削されている。これが築造時のままであることは、葺石が直接にこのⅥ層に設けられていること、これを覆うⅣ層の池沼堆積土層が第4トレンチのそれに対応する古いものであることから窺える。

Ⅴ層は、最初の葺石で、直下の朝和層に突込むように置かれている(図版七1)。葺石下端の腰石は、大は長径五五センチほどある角の丸くなった花崗岩を据えている。この葺石は、昭和四十九年の樋管改修工事の折に止水壁部分の掘方に断面が検出された葺石(本誌26号)の続きである。本陵の築造時より、渡土堤を設けるべく地山を掘残し、その上

に礫を葺いて濠堤としたものである。

葺石及び掘削された濠底の地山の上には、有機物を多含する粘質の黒灰色ないし黒褐色の、最初の濠底の堆積土が層を形成している。Ⅵ層は勿論、Ⅴ・Ⅳ層からも出土品はない。

Ⅲ層は、二次的な堤体の盛土である。間に礫をかみ、それより上は黄味がかった灰褐色、下は青灰色の粘土である。下にいくにつれ灰黒色ないし黒褐色となる。第2・3トレンチと同じ様相を呈する。この層の礫群直上ないしこれと同一レベルから多量の燻瓦が、土師器Ⅲ(出土品実測図5)と伴出し、その中には蠅羽瓦へらばや軒先瓦(20・65)が含まれている。下部の青灰色粘土中から瓦器碗(9・10)・須恵器(13)が出土した。

Ⅱ層は、二次堆積のヘドロ層。他のトレンチの表土にあたるものは見出されない。昭和四十九年に施工の護岸工事のラス張りコンクリート、その基礎と掘方及び地均しの置土(Ⅲ_a層)がこれに代っている。

第6トレンチ(第14図6) 発掘区の最下層は、径一センチ以下の白色小石を多く含んだ砂質土である。梅田氏によれば、朝和層とのことであったが、他のトレンチの朝和層とは全く様相を異にする。

Ⅵ層の上は、Ⅲ層の二次的な盛土とみられるが、複雑な層序を示し、断定しがたいところもある。大きく上下二分層され、上半部は朝和層の粘土を盛上げたもので、黄褐色ないし黄白色を呈する。間に一度削平したような面があり、二度にわけて盛上げたものらしい。下半部は、黒灰

色粘土層を主体にし、上半部と接する部分には、第2・3・5トレンチ同様に礫が散在する。Ⅲ層下半部は、人為的な盛土のようでもあるが、ヘドロ状の粘土層が砂層をはさんでいたりして二次的な堆積層ともとれる。一応ここでは盛土としておく。礫群の直上及び中から棧瓦を含む多量の燻瓦が出土し、Ⅲ層上半部が盛られたのは、遡っても江戸中期を上限とすることが知られる。瓦器鉢（出土品実測図8）、磁器碗（19）、信楽の摺鉢、埴輪円筒底部（45）、不明土製品（64）などが伴出した。

Ⅱ層は二次的な堆積土。Ⅰ層は表土で、土師器（出土品実測図1）が出土した。

第7トレンチ（第14図7 図版七2） 発掘区の最下層は、花崗岩の風化した岩盤（Ⅵ層）で、非常に柔らかく、墳丘側は、よく遺っていて上面がほぼ水平である。濠側は凹凸を示しながらも濠法面を形づくるように掘削されている。既に原初の遺構は失われている。

墳丘側の水平に掘削されたⅥ層の直上に、厚約二メートルのⅢ_b層がのっている。第4トレンチⅢ_b、Ⅲ_d層及び第8トレンチのⅢ_a層に対応すると思われる盛土である。Ⅲ_aは、昭和四十九年の工事に係るラス張りコンクリートと板柵の裏込め置土。

Ⅱ層は濠底の二次堆積土。Ⅰ層は表土。

このトレンチからは出土品がない。

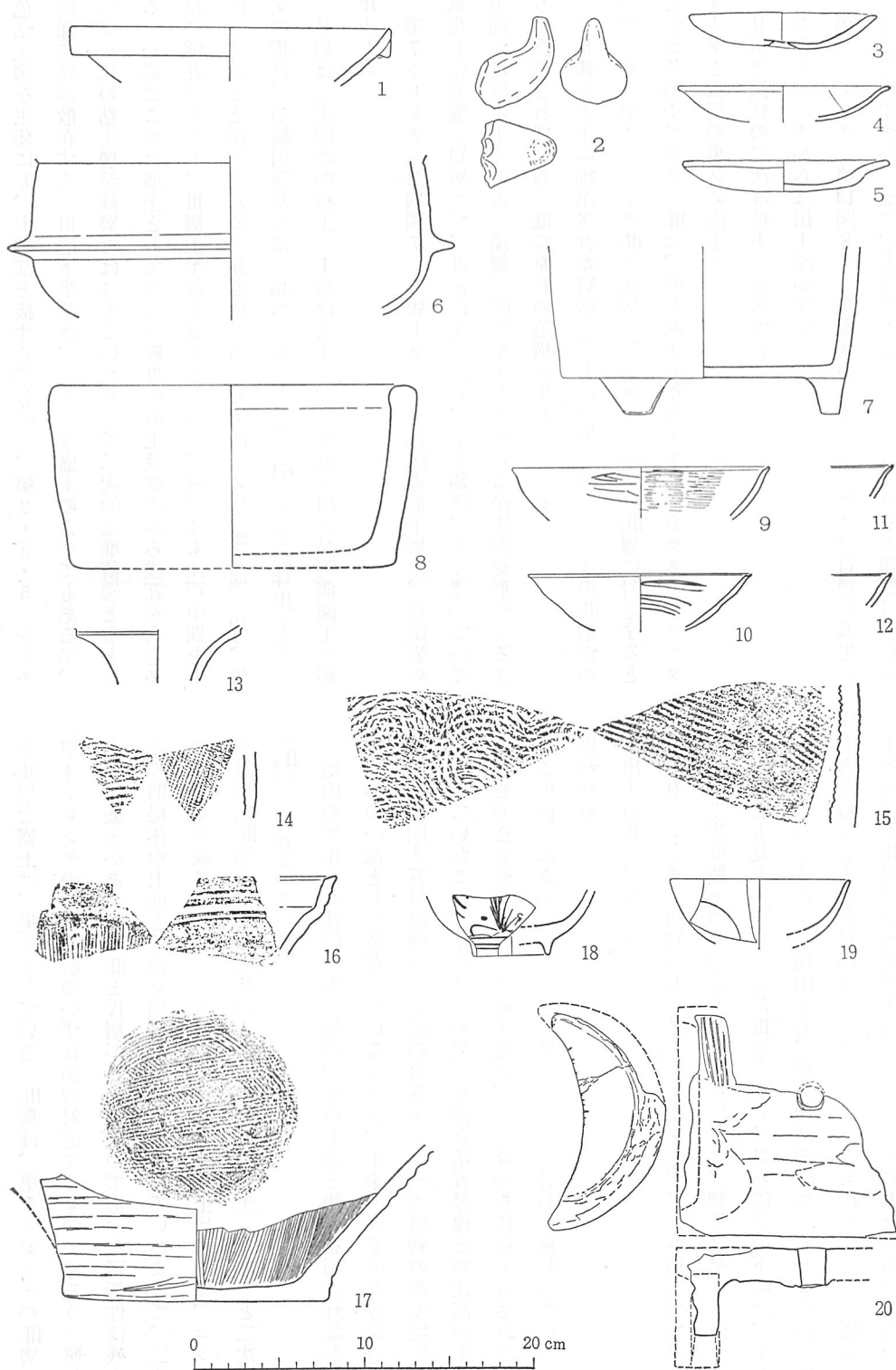
第8トレンチ（第14図8） 発掘区の基盤をなすのは、Ⅵ層の風化した花崗岩の柔かい岩盤で、上面は平らに掘削され、この上に朝和層らしい

土Ⅲ層を盛上げ、堤体としている。Ⅲ層は、第7トレンチのⅢ_b層および第4トレンチのⅢ_b、Ⅲ_d層のいずれかの対応するものであろう。原初の渡土堤に盛土があつて、Ⅲ_aとⅣ層が一体のものであつた可能性は残ろう。この旧堤体の上面と法面を掘削して暫く放置していたようで、二次堆積のⅡ層が形成されている。これらの上にⅢ_b層が盛上げられて、コンクリート護岸（Ⅲ_a層）以前の堤体の表層を形成し、表土（Ⅰ層）と二次堆積土（Ⅱ層）が覆っている。

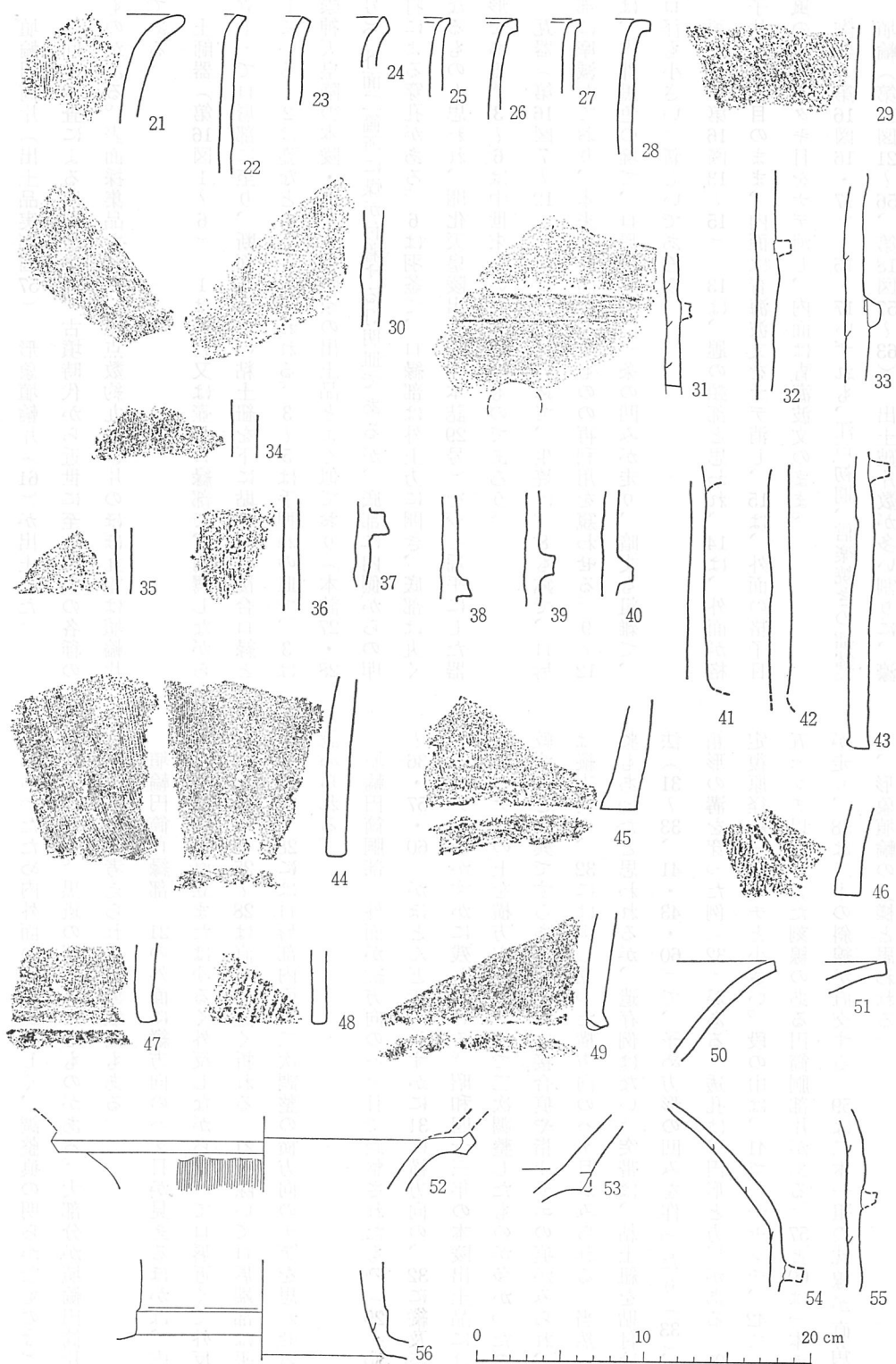
地山の風化した花崗岩の岩盤が、その上面と法面を削られながらも、旧堤体の一部として遺存していることは、本来、同じ第五号濠の対面にあたる第四、五号濠間の渡土堤の第5トレンチで原初の渡土堤に葦石が葺かれていたこと、南西隣りの第六号濠と第五号濠との比高が大きいこと等を考え合せると、この渡土堤は、濠を穿つ折に掘り残されて原初からこの位置にあつたことだけは確かである。葦石で覆われていたものと思われる。

出土遺物は、何もない。

第9トレンチ（第14図9） 表土でもあり、二次堆積土でもあるⅠ層の下に二次堆積土のⅡ層がある。それ以下は、判然とせず、盛土とも二次堆積とも見える礫を含んだⅢ層があり、さらにその下には、第8トレンチとの対応関係から地山とも、横方向に細分されるところから盛土とも考えられる土層が見出されるが、いずれとも決し難い。一応ここでは上層を盛土Ⅲ層、下層を地山Ⅵ層とし、今後の調査に期待したい。



第16図 景行天皇陵の出土品(1) (1/4)



第17図 景行天皇陵の出土品(2) (1/4)

埴輪円筒片（出土品実測図57） 形象埴輪片（61）が出土した。

今回の調査による出土遺物は、古墳時代から近世に至るまでの各種のものがある。表面採集品を含め、総点数約九六〇片のほぼ九割は埴輪片である。

土師器（第16図1～6） 1は器台又は壺の口縁部で、内彎しながら立上って口唇部に至り、断面三角形の粘土紐を下に貼付けて複合口縁としている。2は甕などの把手と思われる。3～5は手捏ねの皿で、3は崇神天皇陵の本陵・い・ろ号陪冢の出土品とよく似ており（本誌27・28号）、外面一箇所に煤が付着する灯明皿であるが、底部に内側からの叩打による穿孔がある。6は羽釜で、口縁部は外上方に開き、底部は丸くなるものと思われ、開化天皇陵出土品（本誌29号）を少し扁平にした器形である。3～6は中世末ないし近世のものであろう。

瓦器（第16図7～12） 7は、三足の鉢で、生焼け。8も鉢で、口唇部は摩滅しており、本来は器高のあるものの再利用を窺わせる。9～12は、内外黒色の碗で、口唇部内側に一条の凹みがあり、暗文も粗雑で、口径も小さい。新しいであろう。

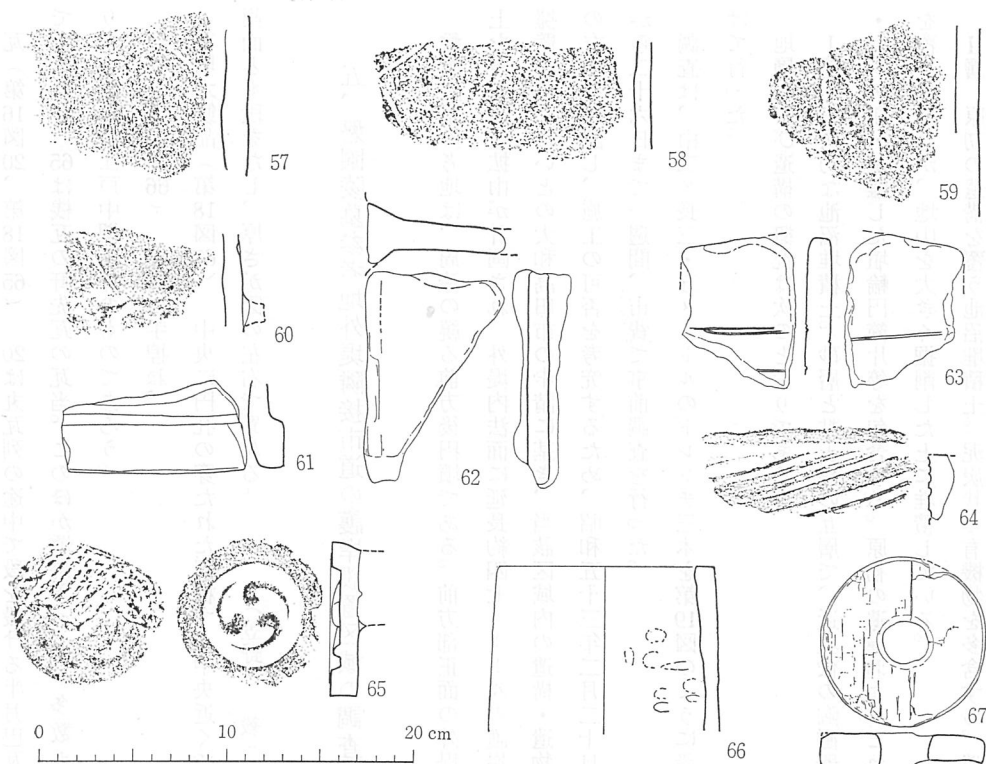
須恵器（第16図13～15） 13は、甕の頸部と思われる、14は、外面が格子状タタキ目のまま、内面は青海波文をナデ消し、15は、外面の格子目風の平行タタキ目をナデ消し、内面は青海波文のまま。

陶器（第16図16・17） 16・17いずれも、江戸初期、信楽焼きの擂鉢。埴輪（第17図21～56、第18図57～63） 出土破片数が多い割りに、濠

底にあったため内外面の風化が著しく、調整痕の明らかなものはごく少数にすぎない。黒班の認められるものがある。大部分が埴輪円筒片であるが蓋や盾と考えられる形象埴輪もある。

埴輪円筒口縁部 21の外面に縦方向のハケ目が見えるほかは、内外面の調整不明。直立またはゆるく外反しながら立って口唇近くで外反するものが多い。25～28は直角に近く折れる。21を除いて口唇端部は平に終わり、24～28には口唇部内面に二次調整の横方向のナデを思わせる稜が認められる。

埴輪円筒胴部 外面が縦方向のハケ目で調整されたもの（29・30・34～36・57・60）がほとんどで、わずかに31に横方向の、32に縦及び横方向のハケ目をかすかに残している。昭和四十三年の本陵出土品には縦方向のハケ目の上を横方向のハケ目で二次調整したものが多かったのと比較すると奇異ですらある。内面は接合痕や指オサエの痕がみられ、30には縦方向の、32には少し立った横方向のハケ目がみられる。当然ナデ調整もあったと思われるが、遺存例はない。突帯は、粘土紐を貼付ける手法（31～33、41・43・60）で、予め方形の凹みを作ったり（33）、断面箱形の溝を穿った例（32）がある。透孔は、円形と方形がある。31は推定復原径約三センチと小さい。段の中は、41で一センチ、42で一三・五センチ以上。また刻線のある円筒胴部片がある。57と60は一本の斜線が走り、58は二本の斜線が直交する。59は二本一組の沈線が直角をなし、形象埴輪の文様と思われる。



第18図 景行天皇陵の出土品(3) (1/4)

埴輪円筒底部 いずれも外面は縦方向のハケ目で共通しているが、内面は、44では予め施したナデツケや太いハケ目の上を、ナデと細かいハケ目で再調整しているようであり、45・47の下端に近い内外両面は横方向のナデで、下端部は通常みられる禾本科植物の圧痕がなく平らになっている。49には、基部成形の粘土紐（帯）の斜めに走る接合痕が認められる。第一段の突帯まで遺存する唯一の例である第4トレンチ1号埴輪43によれば、基底部の高さは約一六センチ。

朝顔形埴輪 50・51は口縁部、52・53は頸部から口縁部の段まで、54・55は肩部の破片である。全形はもとより調整痕も不明のものばかりで、わずかに52の頸部に縦方向のハケ目がみえる。50はもう少し外反するかも知れない。53の段下部の径は約三三センチを計る。

蓋形埴輪 56は、朝顔形埴輪の頸部のようでもあるが、径や類例からみて蓋の十字形飾板をのせる頂部の円筒部分であろう。頸部付根に小さな突帯を繞らす例は、日葉酢媛命陵出土の蓋形埴輪にもある。

盾形埴輪 59は、盾の中央部すなわち埴輪円筒部に描かれた口形の文様であろう。61は、盾の一段と厚くなった縁取り部分、62は、盾の両翼と円筒とを接合して支える板と考えられる。

不明埴輪 63は、形象埴輪であろうが、器形が不明。片面に三条、他面に一条の沈線が走る。

不明土製品（第18図64） 破片のため全形がわからないが、一面に斜行するU字溝が多数走る素焼きの土製品。

瓦（第16図20、第18図65） 20は丸瓦列の途中で段を設ける半月巴瓦

であろうか。65は棧瓦の軒先瓦の瓦当。このほか燻焼きの瓦が多数あり、これらは江戸中期以降のものであろう。

土管（第18図66） 瓦質の手捏ね。

不明木製品（第18図67） 中央に円孔の穿たれた円板で、中央近くで両面とも段をなし、厚さが図の左右で異なる。（笠野 毅）

五、磐園陵墓参考地外堤隣接市道の護岸設置区域の調査

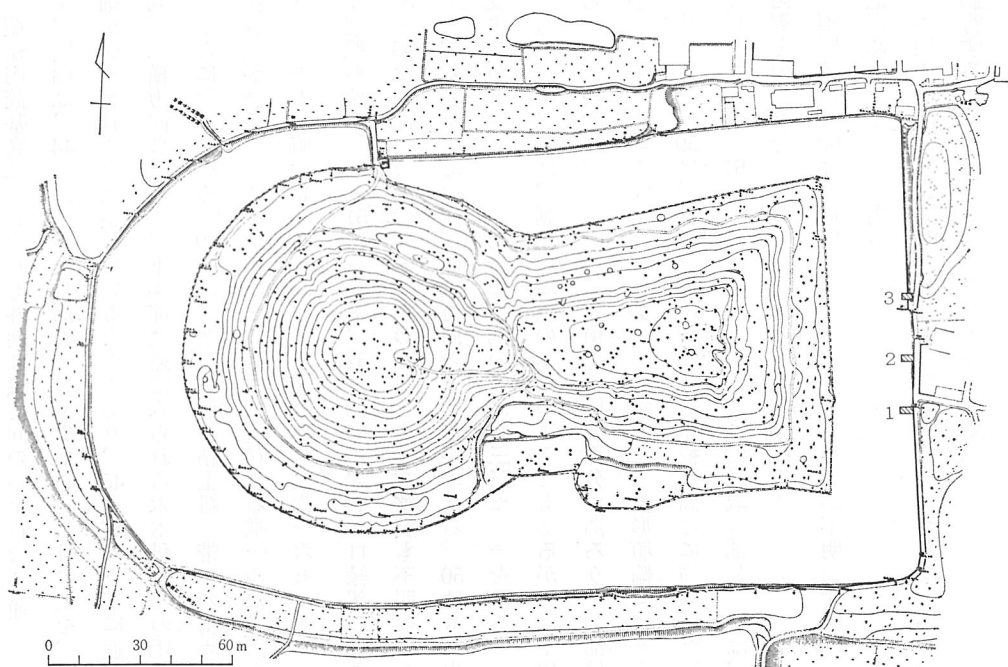
磐園陵墓参考地は、周濠の繞る前方後円墳である。前方部正面の外堤上を走る市道拡巾が計画され、外堤内法面に延長約四七メートルの護岸擁壁を設けたいとの大和高田市の申請に基き、当該区域内の遺構・遺物の有無を確認し、施工の可否を考究するため、昭和五十三年二月二十日から二十六日まで一週間、市費で事前調査を行った。

調査は、巾二×長三・五メートルのトレンチ三本を第19図のように設けて行った。

地層および遺構の概況は次のとおりである。

I層 二次的な池沼堆積土。砂層と粘土層の互層で、近現代の陶磁器・ガラス瓶・遊離した埴輪円筒片等を包含する。原初の遺構およびこれを覆う堆積層が、地山を大きく掘削した上に堆積している。

II層 原初の遺構を覆う池沼堆積土。泥炭状の有機物を多含する。遺



第19図 磐園陵墓参考地地形図



1. 景行天皇陵 第4トレンチ 埴輪列出土状況



2. 景行天皇陵 第4トレンチ 基壇葺石出土状況



1. 景行天皇陵 第5トレンチ 渡土堤葺石出土状況



2. 景行天皇陵 第7トレンチ 風化花崗岩の岩盤